母親の養育態度が及ぼす自己の子ども観への見方について

五十嵐　哲也（愛知教育大学学校教育講座）
堂本　愛弥（朝来市立生野中学校）
秋光　恵子（兵庫教育大学大学院学校教育研究科）

The Relationship between Perceptions of Children and Mother’s Parenting Attitude

Tetsuya IGARASHI (Department of School Education, Aichi University of Education)
Aimi DOMOTO (IKUNO Junior High School)
Keiko AKIMITSU (Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education)

要約　近年，子ども観の揺らぎが子どもへの関わり方に影響しているとの指摘がある。青年期の子ども観を形成する要因としては母親の養育態度が考えられるが，この点は実証的に検討されていない。そこで，大学生302名を対象に検討を行った結果，母親にありのままの自分を受け入れてもらえ，愛情を感じながら育てられた人は，自分も同じように，子どものことを愛おしいと思ったり，一人一人の個性を認めてあげたい，尊重したいと思ったりする傾向にあることが示唆された。また，母親から有無を言わさぬ態度で行動をコントロールされて育った人は，子を親の所有物であると思う傾向にあった。さらに，母親が子どもとまっすぐ向き合おうとしない態度で育てられた人は，子を個性的な存在，尊重すべき存在であると思えない傾向にあった。加えて，調査対象者を母親の養育態度によって群分けしたところ，甘やかされて育った群において，特徴的な子ども観が見出された。

キーワード：養育態度，子ども観，母親

1. 問題と目的

近年，育児拒否や児童虐待，子どもに対する残酷な犯罪など，子どもをめぐる様々な事件が増えている。住田・中村・清水・横山・山瀬 (2004) は，これらの問題の根幹には「子どもが何を考えているのか分からない」という子ども観の揺らぎがあり，それが「子どもとどう接したらいいか分からない」といった関わり方への揺らぎに関連していると指摘している。また，子ども観の影響について，星野・日潟・吉田 (2008) は，子どもの行動が，ある大人にとっては「いろいろなことに挑戦しようとする無邪気な姿」と捉えられ，一方である大人にとっては「困ることをたくさんするやんちゃで悪い子」と捉えられてしまうのは，その人がもつ子どもイメージに依拠する部分があると考えられると指摘する。つまり私たちは，子ども観を基に子ども達を判断して対応を決定しており，「教育」のあり方は，子どもがどんな存在だと考えるかという「子ども観」によって大きく変わると考えられる。そのため，自分がどんな子ども観を持っているのかを知り，理解しておくことは子どもと関わる上で大切となる。

では，子ども観とはどのように形成されるのか。子ども観の形成についての実証的研究に目を向けると，親になる前の段階である青年期の子ども観は，それまでの子どもとの接触経験をもとに形成されると考えられてきた。例えば横山 (2005) は，地域の子どもとの接触頻度が高い者ほど，肯定的な子ども像を形成するとしていた。また，礪波 (2012) は，女子大学生を対象に調査を行った結果，身近に幼い子どもがいる，またはいた人は，子どもに対してより良いイメージを与え，子どもに対する共感性や関心が高いことを明らかにした。さらに矢田 (2008) は，子どもイメージが保育実習前・実習後でどのように変化するのか調査した結果，実習後は子どもとの相互作用によってかわいいなどの愛着がわき，子どもに対する感情，イメージが

好転することを明らかにした。しかし，岡野 (2003) は，良好な子どもイメージの形成には，乳幼児との接触体験だけではなく，家族関係のありようも関連すると指摘する。その理由として，岡野 (2003) は，子どもを取り巻く人的環境のうち，家族は最も早期から永続的に関わる対人関係であり，子どもは家族との相互作用を通して対人関係のスキルを獲得していくためであると主張している。しかし，実際に子ども観の形成について，家族関係と関連づけて検証した研究はほとんど見当たらない。

心理学的な研究において，家族関係について多く検討されているのは，養育態度についてである。親の養育態度を扱った先行研究では，姜・酒井 (2006) が，母親の受容的な養育態度は，その子の肯定的自己像に正の影響を与えていることを明らかにした。この理由として，姜・酒井 (2006) は，親から受容されていると感じることは，家庭での様々な活動において，親が応援してくれたり，関心を持って見守ってくれたりするなど，自分のやりたいことができる環境の中で育っているため，挑戦したことがうまくできた経験を多く積んでいるからだと主張している。また，武藤 (2004) は，愛情の得点が高い親を持つ中学生は，自己表現・主張が強く，自発的に他者と関わり，自己の意見を明確に主張できる傾向にある一方，統制と服従の得点が高い親を持つ中学生は，利己的表現が強くなってしまう傾向があることを明らかにした。このように，親の養育態度によって子どもの性格や行動に影響が与えられていることは，多くの研究で証明されてきている。

さらに，瀧・小川内 (2013) は，幼少期における親の養育態度を回想させ，親の養育態度が受容的であると認知した大学生ほど，自尊感情が高まり，自己肯定感や自己価値観が比較的高いことを明らかにした。また，梶本・菅 (2019) は，同じく回想法で，幼少期の母親の養育態度が受容的であると認知した大学生ほど，自分が母親から大切にされたのと同じように友人を大切にでき，友人を傷つけたりしないよう気を遣うようになると述べている。このように，幼少期の親の養育態度は大学生になっても影響が持続するものであり，中でも母親の養育態度は子どもの心理的発達に長期的な影響を及ぼすと考えられる。しかし，母親の養育態度が青年の子ども観形成に関与するかを検討した研究は，いまだ見当たらない。

そこで本研究では，大学生を対象に，幼少期の母親の養育態度が自己の子ども観に影響を及ぼすのかについて検討する。

2. 方法

2.1. 実施時期

2021 年 4 月から 6 月に実施した。

2.2. 調査協力者

4 年制大学 8 校に通う男女 1,126 名を対象とし，341 名から回答を得た (回収率:30.3%) 。そのうち，回答に不備があったものや，調査への同意が得られなかったものを除き，302 名(1 回生 113 名 (男性 21 名，女性 92 名) ・2 回生 45 名 (男性 4 名，女性 40 名，不明者 1 名) ・3 回生 38 名 (男性 8 名，女性 30 名) ・4 回生 100 名 (男性 28 名，女性 70 名，不明者 2 名) ・学年不明者 6 名，平均年齢 19.8 歳 (標準偏差 2.06) を分析対象とした。有効回答率は 88.6%である。

2.3. 調査手続き

調査は無記名で行った。また，本調査の結果は学術的な目的以外には使用せず，回答結果は統計的に処理するため，個人が特定されたり外部に知られたりすることは一切ないこと，また回答は任意であり，いつでも回答を拒否・中断できることを記載した。

2.4. 調査内容

本研究では Google フォーム・質問紙を用い調査を行った。質問の構成は以下の通りであった。

(1) フェイスシート

学年・性別・年齢について尋ねた。

(2) 子ども観

子ども観尺度（嘉数・島袋・當山・喜友名・友利・廣瀬，1997）を使用した。この尺度は，「いとおしい存在」（8 項目），「個性的存在」（8 項目），「煩わしい存在」（6 項目），「未熟な存在」（7 項目），「親の所有物的存在」（5 項目），「尊重すべき存在」（4 項目），「教育すべき存在」（3 項目）の 7 因子，合計 41 項目から構成され，5 件法（「1. 全くあてはまらない」～「5. よくあてはまる」）で回答を求めた。

(3) 母親の養育態度

認知された母親の養育態度尺度 (山本・上手，2017) を使用した。この尺度は，「受容的かかわり」 (8 項目) ，「統制的かかわり」 (7 項目) ，「責任回避的かかわり」 (5 項目) の 3 因子，合計 20 項目から構成される。調査対象者には，小学生の頃の母親の養育態度を思い出してもらいながら，各項目について，6 件法 (「1.まったくそうではない」～「6.いつもそうである」) で回答を求めた。「受容的かかわり」とは親が子どもを見守り，家の中ができるだけ快適であることに努め，不安や恐怖を感じていればそれらを取り除くための努力を怠らないといった養育態度であると認知することを示す。「統制的かかわり」とは，親が子どもに有無を言わさぬ態度で子どもの行動をコントロールしようとする養育態度であることを認知することを示す。「責任回避的かかわり」とは，親が子どもの行動に腰が引け，無責任な姿勢で接している養育態度であると認知することを示す (鈴木・松田・永田・植村，1985) 。

3. 結果

3.1. 各尺度の信頼性

各尺度の内的整合性を確認するため，それぞれ先行研究に則って下位尺度に分類し，Cronbach の α係数を算出した。

その結果，子ども観については，「いとおしい存在」は α＝.87，「個性的存在」は α＝.82，「煩わしい存在」は α＝.80，「未熟な存在」は α＝.68，「親の所有物的存在」は α＝.58，「尊重すべき存在」は α＝.57，「教育すべき存在」は α＝.22 であった。「未熟な存在」「親の所有物的存在」「尊重すべき存在」の 3 つの因子については原尺度における α係数が.27~.70 の範囲にあり，一部かなり低いものも含まれている。従って，本研究でも原尺度と同様に使用可能なものであると判断した。ただし，「教育すべき存在」という尺度については，原尺度において α＝.59 であった。しかし，本研究では α＝.22 と著しく低いため, 今回は使用しないこととした。

母親の養育態度については，「受容的かかわり」は α＝.80，「統制的かかわり」は α＝.83，「責任回避的かかわり」は α＝.65 であった。「責任回避的かかわり」の α係数はやや低いが，使用可能だと考えた。

3.2. 子ども観・母親の養育態度の性差

性別による差の検定を行うため，使用した尺度の各下位尺度の平均得点の *t* 検定による分析を行った（Table1）。

その結果，子ども観では「いとおしい存在」「個性的存在」「尊重すべき存在」（*t* (79.61~296) ＝ ‐3.18~ ‐2.32，*p*<.05~.01）に有意差が認められ，全て女性の得点が高かった。

母親の養育態度については，「受容的かかわり」（*t* (296) ＝2.51，*p*<.05）に有意差が認められ，女性の得点が高かった。

3.3. 子ども観と母親の養育態度の関連

子ども観に対して，母親の養育態度がどのように関連しているのかを検討するために，子ども観尺度を目

Table1　子ども観・母親の養育態度の性差

	男子 (n=62)		女子 (n=236)			
	M	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*t* 値	
【子ども観】						
いとおしい存在	3.82	(.83)	4.18	(.62)	-3.18	＊＊
個性的存在	4.36	(.53)	4.52	(.47)	-2.32	＊
煩わしい存在	3.33	(.66)	3.30	(.71)	.24	
未熟な存在	3.65	(.65)	3.65	(.52)	-.04	
親の所有物的存在	2.37	(.58)	2.27	(.64)	1.14	
尊重すべき存在	4.24	(.50)	4.39	(.53)	-2.01	＊
【母親の養育態度】						
受容的かかわり	4.28	(.83)	4.57	(.78)	-2.51	＊
統制的かかわり	3.05	(.99)	2.90	(1.04)	.99	
責任回避的かかわり	2.30	(.69)	2.22	(.79)	.73	

$*p < .05$　$**p < .01$

Table2　母親の養育態度と子ども観の関連

	目的変数											
説明変数	いとおしい存在		個性的存在		煩わしい存在		未熟な存在		親の所有物的存在		尊重すべき存在	
受容的かかわり	.33	***	.29	***	-.10		.06		.03		.20	**
統制的かかわり	.04		-.07		.10		.07		.25	***	-.04	
責任回避的かかわり	-.09		-.21	***	.02		.03		.10		-.12	*
adjR²	.09	***	.10	***	.02		.00		.06	***	.04	**

$*p < .05$　$**p < .01$　$***p < .001$

的変数，母親の養育態度尺度を説明変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。

その結果 (Table2) ，「いとおしい存在」は，「受容的かかわり」との有意な正の関連を示した(β=.33，p<.001) 。「個性的存在」は「受容的かかわり」とは有意な正の関連を示し (β=.29，p<.001) ，「責任回避的かかわり」とは有意な負の関連を示した (β=－.21，p<.001) 。「親の所有物的存在」は，「統制的かかわり」との有意な正の関連を示した (β=.25，p<.001) 。「尊重すべき存在」は，「受容的かかわり」とは有意な正の関連を示し (β=.20，p<.01) ，「責任回避的かかわり」とは有意な負の関連を示した (β=－.12，p<.05) 。「煩わしい存在」と「未熟な存在」は，自由度調整済み決定係数が有意ではなかった。

3.4. 母親の養育態度による対象者の分類

母親の養育態度によって対象者を群分けするため，階層的クラスター分析（ユークリッド平方距離・ウォード法）を実施した。その結果，デンドログラムおよび解釈可能性を考慮したうえで，3 クラスター解を抽出した。得られたクラスターを独立変数，クラスター分析に用いられた母親の養育態度を従属変数とする一要因分散分析を実施した。なお，多重比較には Tukey 法を用いた。結果を Table3 に示す。以下，各得点における主効果の結果を示す。

「受容的かかわり」は有意な主効果が認められた（F（2，301）=14.42，p<.001）。多重比較の結果，「第 2 クラスター」>「第 3 クラスター」>「第 1 クラスター」であることが示された。「統制的かかわり」も有意な主効果が認められた（F（2，301）=195.12，p<.001）。多重比較の結果，「第 1 クラスター」>「第 2 クラスター」>「第 3 クラスター」であることが示された。「責任回避的かかわり」も有意な主効果が認められた（F（2，301）=143.30，p<.001）。多重比較の結果，「第 2 クラスター」>「第 3 クラスター」であることが示された。

3.5. 各クラスターの特徴

母親の養育態度に含まれる 3 つの下位尺度の獲得状況が，各クラスターによってどのように異なるのかを検討することとした。そのうえで，クラスターごとに母親の養育態度各下位尺度得点の個人内差を検討するため，反復測定分散分析を実施した。なお，分析にあたっては，あらかじめ母親の養育態度については標準得点化した。各クラスターの特徴は Figure1 に示す通りである。

第 1 クラスターでは有意差が認められ (F (1.69，136) =60.59，p<.001)，Bonferroni 法による多重比較の結果，「統制的かかわり」>「受容的かかわり」「責任回避的かかわり」であることが示された。第 2 クラスターでも有意差が認められ， (F (1.76，56) =64.47，p<.001) ，Bonferroni 法による多重比較の結果，「責

Table3　クラスターによる母親の養育態度の違い

	第 1 クラスター (n=137)		第 2 クラスター (n=57)		第 3 クラスター (n=108)		主効果		多重比較
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	F 値		
受容的かかわり	4.29	(.94)	4.94	(.59)	4.54	(.59)	14.42	***	1<3<2
統制的かかわり	3.72	(.74)	2.77	(.77)	2.00	(.53)	195.12	***	3<2<1
責任回避的かかわり	1.95	(.57)	3.34	(.49)	1.97	(.57)	143.30	***	3<2

***p<.001

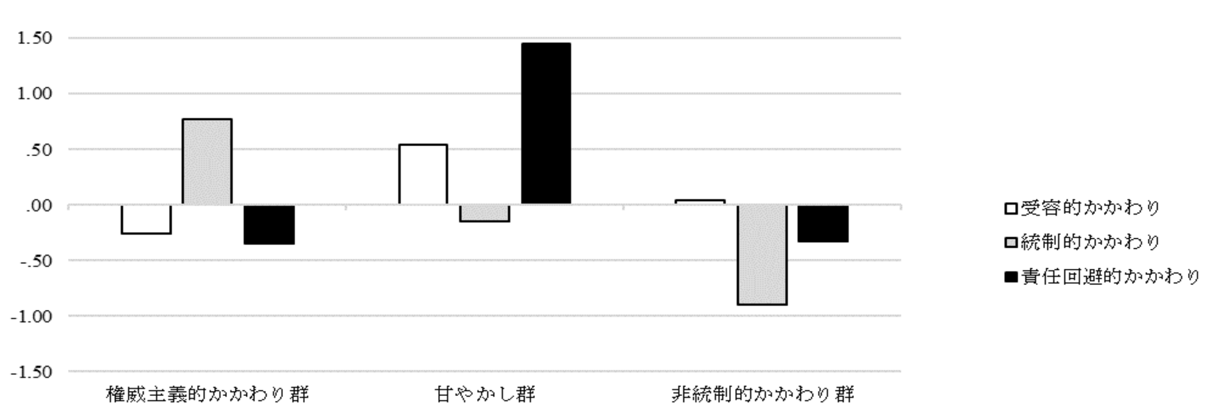

Figure1　各群の母親の養育態度下位尺度の特徴

任回避的かかわり」>「受容的かかわり」>「統制的かかわり」であることが示された。第 3 クラスターでも有意差が認められ，(F (2，107) =55.65，p<.001)，Bonferroni 法による多重比較の結果，「受容的かかわり」>「責任回避的かかわり」>「統制的かかわり」であることが示された。

以上の結果から，第 1 クラスターを「権威主義的かかわり群」，第 2 クラスターを「甘やかし群」，第 3 クラスターを「非統制的かかわり群」と命名した。

3.6. 母親の養育態度によって分類されたクラスターによる子ども観の違い

得られたクラスターを独立変数，子ども観を従属変数とする一要因分散分析を実施した。なお，多重比較には Tukey 法を用いた。結果を Table4 に示す。以下，各得点における主効果の結果を示す。

「親の所有物的存在」は有意な主効果が認められた（F（2，301）=3.93，p<.05）。多重比較の結果，「非統制的かかわり群」が最も低く，「甘やかし群」が最も高かった。その他の子ども観については，有意な結果が得られなかった。

4. 考察

4.1. 子ども観・母親の養育態度の性差について

本研究の結果，子ども観では，「いとおしい存在」「個性的存在」「尊重すべき存在」において，女性の方が高いことが示された。礪波 (2012) は，男性より女性の方が子どもに対しての好感度や親和欲求の得点が高いと指摘しており，本研究と一致する。

母親の養育態度については，「受容的かかわり」において，女性の得点の方が高いことが示された。この点に関し，高富・桂田 (2011) は，女性の方が親の養育態度を受容的だと感じていると述べており，本研究と同様の結果であると言える。

4.2. 子ども観と母親の養育態度の関連について

「受容的かかわり」と「いとおしい存在」「個性的存在」「尊重すべき存在」との間に，有意な正の関連が認められた。母親にありのままの自分を受け入れてもらえ，愛情を感じながら育てられた人は，自分も同じように，子どものことを愛おしいと思ったり，一人一人の個性を認めてあげたい，尊重したいと思ったりする傾向にあったと言える。受容的な母親の養育態度が及ぼす子への影響について，森下 (1986) は，受容的な母親の養育態度が共感性を望ましく発達させることを明らかにした。また，親から褒めてもらったり，認めてもらえたりした経験から，自分も同じように相手のことを認めたり，思いやりを持って関わったりするなどの愛他的なパーソナリティの形成に繋がることも指摘されている (小高，2017) 。自分のことを何よりも大切に思い，理解してくれた母親を見て育つことで，他の人との関係の中でも相手の気持ちに寄り添ったり，人の良い所を認めたりすることの大切さを学んでいると考えられる。そのため，本研究でも，子どもに対して愛情を持ち，一人一人個性があり，尊重すべき存在だと思う結果になったのではないか。

「統制的かかわり」では，「親の所有物的存在」との間に有意な正の関連が認められた。すなわち，母親から有無を言わさぬ態度で行動をコントロールされて育った人は，子を親の所有物であると思う傾向にあった。統制的な関わり方は，子どもの自尊心を下げ (瀧・小川内，2013) ，不安感情を高める (小高，2017) と言われている。さらに，藤原・伊藤 (2010) は，母親の支配的な養育態度は，子どもの自律性に負の効果をもたらすことを明らかにした。井上 (1995) は，自律性を「自分の行動や感情を自分がコントロールしているという感覚であり，それを背景にして他者との適切な対人距離を保つことができる特性」と定義している。統制的に育てられた人は，親の考えに従わなければならず，自分の考えを否定され続けていたため，自分の行動や感情を，自分ではなく親がコントロールしているという認識になったと考えられる。そのため，自身が子どもを捉える際も，子どもを一人の人格を持った人間だと理解できず，子どもは親が思い通りにして当

Table4　クラスターによる子ども観の違い

	権威主義的かかわり群 (n=137)		甘やかし群 (n=57)		非統制的かかわり群 (n=108)		主効果		多重比較
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	F 値		
いとおしい存在	4.10	(.73)	4.07	(.67)	4.08	(.65)	.04		
個性的存在	4.49	(.50)	4.38	(.52)	4.53	(.46)	1.82		
煩わしい存在	3.34	(.70)	3.33	(.68)	3.28	(.70)	.23		
未熟な存在	3.64	(.57)	3.66	(.55)	3.66	(.51)	.06		
親の所有物的存在	2.29	(.65)	2.47	(.71)	2.18	(.52)	3.93	*	3＜2
尊重すべき存在	4.36	(.55)	4.30	(.54)	4.38	(.49)	.46		

*p<.05

然だと考えるのではないかと推測される。

「責任回避的かかわり」では，「個性的存在」「尊重すべき存在」との間に有意な負の関連が認められた。すなわち，母親が子どもとまっすぐ向き合おうとしない態度で育てられた人は，子を個性的な存在，尊重すべき存在であると思えない傾向にあると言える。責任回避的かかわりは，従来の多くの研究には含まれていない因子であり，「私の言いなりになる方だった」「私が悪いことをしてもあまりとがめたてなかった」などの項目が含まれる (山本・上手，2017) 。これは，戸田 (1990) の「服従」因子と類似しており，服従的な養育態度である母親は子どもの行動に腰が引け，子どもの言いなりになっていると述べている。また，武藤 (2004) は，服従的な養育態度の親を持つ子どもは，他人のことを考えず，自己主張ばかりする傾向にあると指摘した。さらに，岡堂 (1976) は，服従的な母親を持つ子どもは家庭内で自分の思い通りになる経験が多く，自分本位になり，他者を尊重できなくなると指摘している。このような家庭では，母親の態度が基本的に受け身であったことが考えられ，そうした母親の姿勢を見ているうちに，子ども自身も自ら進んで行動したり人と深く関わったりすることをしなくなり，子どもにも個性があって一人の人間として尊重するべき存在なのだという感覚が乏しくなるのではないか。

4.3. クラスターによる子ども観の違いについて

(1) クラスターの特徴

第 1 クラスターは，受容が低く統制が高いため，Baumrind (1967) の権威主義的かかわりに相当すると判断した。権威主義的態度について，荻田 (2021) は，しつけに関する基準などを持っているが，子どもとのコミュニケーションは重視せず，独裁的に判断する傾向があると述べている。また，第 2 クラスターは，受容と回避 (服従) が高いため，Symonds (1939) の甘やかしに相当すると判断した。森下・前田 (2015) は，「私が欲しがった物はなんでも買ってくれた」「なんでも私がしたいようにさせてくれた」「だだをこねたら私の意見が通ることが多かった」などの項目を含む因子を甘やかしと設定した。このように，甘やかし群では子どもの気持ちを尊重しすぎて，なんでもしてあげる状態になっていると考えられる。一方，第 3 クラスターでは統制がかなり低いことのみが特徴であった。そこで，非統制的かかわり群と設定した。

(2) クラスターによる子ども観の違い

「親の所有物的存在」において，非統制かかわり群よりも甘やかし群の方が有意に高い結果となった。注目すべき点は，「親の所有物的存在」は，統制的かかわり群の得点が高いわけではないという点である。先の相関分析では，「親の所有物的存在」と「統制的かかわり」には正の関連があったが，クラスターによる違いを検討したところ，子どもを「親の所有物的存在」と感じているのは甘やかし群であった。この点に関連して，松坂 (2002)は，甘やかし型の親について，子どもの意思を尊重することを子どもの言いなりになることと思ってしまっているため，子どものわがままを黙認する傾向にあると述べた。また，詫摩・依田 (1968) は，母親の養育態度と子どもの性格との関連について，甘やかし型の母親に育てられた子どもはわがまま・反抗的・幼児的・神経質になりやすいことを明らかにした。また，母親から甘やかされて育てられた人は，常に自分の主張が通る環境で育ち，なんでも自分の思い通りになっていたため，自分中心に物事を考えるようになるという指摘もある (岡堂，1976) 。これらを踏まえると，甘やかし群は親という最も近しい他者を思い通りにしていたことによって不適切な対人関係が形成・定着し，他者は自分の思い通りに動かせるものとして認識してしまったと考えられる。

5. 今後の課題

本研究では，大学生が認識する自身の母親の養育態度と，自身の子ども観との間に関連があることが明らかとなった。しかし，今後の課題として次の 2 点が挙げられる。

1 点目は，調査対象者についてである。今回の調査では，ほとんどが教育学部の学生の回答であった。今後はさらに調査対象者を拡大して大学生以外にも調査することで，さらに青年全般に関する結果が得られるのではないかと考えられる。また，子どもの発達過程を考慮に入れるのであれば，多様な年齢層に対する調査や縦断的調査などを行い，母親の養育態度によって自己の子ども観がどのように変わっていくのか詳細に検討していく必要があると考えられる。

2 点目は，回想法の限界についてである。本研究では，大学生を対象に，小学生の頃の母親の養育態度について回想法による調査を行った。つまり，回答者自身が現時点において，小学生の頃の母親の養育態度をどのように受け止めているかという視点からの検討であった。そのため，子どもに認知された養育態度が，どの程度まで実際の親の養育態度を反映しているかに関しては問題が残った。今後，可能であれば，子どもの母親にも自身の養育態度について評定してもらい，比較検討する必要があるだろう。また，児童期と大学生期とでは，同じ親でも子どもに対する養育態度は異なると推測される。今後は，現在の母親の養育態度も加え，縦断的に検討していきたい。

謝辞

本研究は，第一筆者と第三筆者が指導し，第二筆者が兵庫教育大学学校教育学部に提出した 2021 年度卒

業論文について，加筆修正を行ったものです。本研究の趣旨を理解し快くアンケート調査にご協力いただきました皆様に心から感謝します。本当にありがとうございました。また，五十嵐ゼミの同期の皆様にも多くのご支援を頂きました。御礼申し上げます。

引用文献

Baumrind,D （1967）. Childcare practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*，**75**，43-88.

藤原あやの・伊藤裕子（2010）．青年期後期から成人期初期における女性の心理的発達―母娘関係が心理的健康に及ぼす影響―. カウンセリング研究, **43**, 33-42.

星野修一・日潟淳子・吉田圭吾（2008）．大学生における子ども観に関する一考察． 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，**2**，33-42.

井梅由美子（2011）．青年期女子の母娘関係と対象関係． 東京未来大学研究紀要，**4**，27-35.

井上忠典（1995）．大学生における親との依存一独立の葛藤と自我同一性の関連について． 筑波大学心理学研究，**17**，163-173.

礪波朋子（2012）．青年期の子どもイメージ・育児イメージ及び養護性に関する研究． 京都光華女子大学研究紀要，**50**，41-52.

小高 恵（2017）．学生の母子関係とパーソナリティとの関連性についての一研究． 太成学院大学紀要，**19**，53-62.

梶本千潤・菅 千索（2019）．母親の養育態度と大学生の「友人関係」「社会的スキル」「他者意識」「対人信頼感」の関連について． 和歌山大学教育学部紀要，**70**，117-123.

姜 信善・酒井えりか（2006）．子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連についての検討. 富山大学人間発達科学部紀要，**1**，111-119.

嘉数朝子・島袋恒男・當山りえ・喜友名静子・友利久子・廣瀬真喜子（1997）．大学生の「子ども観」に関する研究 ―保育職志望度との関連で． 琉球大学教育学部紀要，**51**，207-213.

松坂政広（2002）．親の養育態度再考． 日本福音主義神学会，**33**，31-58.

森下正康（1986）．子どものパーソナリティに関する類似性認知と親の養育態度． 日本教育心理学会総会，**28**，32-33.

森下正康・前田百合香（2015）．児童期の母親の養育態度としつけ方略が自己制御機能の発達に与える影響． 京都女子大学発達教育学部紀要, **11**, 99－108.

武藤恵美（2004）．親の養育態度が性格形成に与える影響とは―中学生の対友人行動に現れる傾向―.
日本福祉大学,
https://www.n-fukushi.ac.jp/gakubu/kenko/2009/jn03.pdf （2022 年 8 月 28 日取得）

岡堂哲夫（1976）．心理学的家族関係学 光生館

茨田純久（2021）．親の養育態度と子どもの行動傾向に関する基礎研究． 大阪商業大学共同参画研究所紀要，**2**，1-15.

岡野雅子（2003）.青年期女子の子どもに対するイメージ－彼女たちを取り巻く人間関係と親準備性獲得の課題との関連－．日本家庭科教育学会誌, **46**, 3-13.

住田正樹・横山 卓・中村真弓・山瀬範子・清水一巳（2004）．教育・保育職者のもつ子ども観． 日本子ども社会学会第 14 回大会， http://id.nii.ac.jp/1146/00008144/（2022 年 8 月 28 日取得）

鈴木真雄・松田 惺・永田忠夫・植村勝彦（1985）．子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成． 愛知教育大学研究報告 教育科学, **34**, 139－152

Symonds，P. M. （1939）. *The psychology of parent-child relationships.* NY: D. Appleton -Century Company.

高富莉那・桂田恵美子（2011）．大学生の心理的自立と親の養育態度との関連． 臨床教育心理学研究，**37**, 27-32.

龍 祐吉・小川内哲生 （2013）．大学生の学習的遅延行動に及ぼす認知された親の養育態度と自尊感情の影響. 東海学園大学研究紀要，**18**，145-154.

戸田須恵子（1990）．母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会行動との関係について． 釧路論集，**38**，59-69.

詫摩武俊・依田 明（1968）．性格． 大日本図書株式会社

矢田昭子・笠柄みどり・吉田由美（2008）．保育所実習が看護学生の子ども観に及ぼす影響． 島根大学医学部紀要，**30**，35-42.

山本美夏・上手由香（2017）．親の養育態度が大学生の評価懸念及び適応感に及ぼす影響の検討． 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要，**16**，89-105.

横山 卓(2005)．現代の子ども像に関する一考察． 福岡女子短大紀要，**65**，71-83.